緑谷出久「引き寄せる個性…？」

愛上

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

地球から異世界への転生者であり最強のドラゴンであるクロは、ある日暇だったので異世界からの召喚に答えることに。

そこは個性と呼ばれる力によって従来の地球と大きく変わった、ヒーローという職業が実在する『ヒロアカ』の世界だった。

引き寄せる個性で異世界からチート転生者を呼んだ出久が、クロ達異世界からの住人に修行させられたり魔法を教え込まれたり戦闘術を教え込まれたりして、最高のヒーローを目指すだけの物語。

注意）一部のキャラ（かっちゃん）がＴＳしています。主人公もＴＳ転生者です。緑谷出久がハーレム形成してます。精神的ＢＬ要素ありかもしれません。その他ご都合主義、稚拙な文章などが苦手な方はご注意ください。

目次

1話目 …… 1
2話目 …… 9

1話目

よっす！

俺の名前は『クロ』。

いわゆる転生者ってやつで、元男子高校生。現ドラゴン。

空き瓶で足滑らせて階段から落ちて死んだ後、神様に出くわして転生させてくれるっていうからありがたく転生させて貰ったのに、記憶は残ってるわそもそも人外だわで色々と台無しな始まりをしてしまった残念系ドラゴンさんさ！

ちなみに年齢は千から先は数えてない。なので人化もあらゆる魔法もお手の物。なんだけど俺、実は雌だったみたいでさ。人化した時何故かＦＧＯのお竜さんみたいな容姿になるんだよね。服装は限りなくセーラー服に近い。俺の容姿、一応正統派のこれぞドラゴン！って感じの容姿なのに、何故にお竜さんなのかはこれが分からない。っていうかドラゴンの重厚な鱗がセーラー服ってのも大概無理があるよな。とはいえ俺の知人に体毛がメイド服になる東方の咲夜さん似のチワワ（フェンリル）もいるし、この世界では常識なのかも。うーん、何とも言えん。

まあこんだけ長生きすれば性別がどうとか容姿がどうとか今更過ぎるし。ドラゴンとか人間の男と番とか元男子高校生的に絶対に嫌だしで特に意識することもないんだけどさ。

ああ、今更っていうと、俺が生まれた世界な。剣と魔法の所謂ド定番なファンタジー世界だった。妖精がいたり魔物がいたり、人間が魔法を使えたり剣使って海を割ったりっていうのができる完全なる正統派系異世界って奴だな。

付け加えると、俺は魔法が得意な知的ドラゴンさんである。逆に肉弾戦とかは苦手な。魔法で強化付けれるんならまだマシになるけど、魔法が使えるんならぶっ放した方が早いしな。

そんな俺は普段、『固有結界』を常時独立して発動する魔法を開発して作った自分だけの世界で暮らしている。外にいると『俺の嫁になれ！』だとか『素材寄越せ！』だとかうるさいんだもん。仕方ないね。

今も固有結界の中で元気に引きこもり中。特に今日は何もすることがないのでごろごろだらだらと過ごしているのだ―。
固有結界の中は、結構広大。東には森と湖が広がってて、中心には庭。そして家は俺が考えに考え抜いたデザインが施された、二階建ての小さな家だ。表には小さな畑があったりする。うんうん、家はこれくらいがやっぱりちょうどいいよな。
あー、暇だなー。友達も今日は全員予定があるらしくて遊びに来れないようだし。本も読み飽きたしなー。パソコンとかあればまだ暇も潰せたんだろうけれど。
ベッドの中でごろごろするのにも大概飽きたしな。俺を知ってる人間も全員死に絶えた頃合いだろうし、そろそろ外にでも遊びに行くかな。

「…ん？」

その時だった。
「…何かに魂が引き寄せられてる…？」
なんかこう、袖をくいっと引っ張られたような、そんな感覚。
誰かが召喚しようとしているのだろうが…しかし、いつもは強引に檻の中に閉じ込めようとするような乱暴な術式なのに今回は自棄に優しいというかなんというか。
しかも行先…この世界じゃないな？
異世界からの召喚か。目にするのもずいぶん懐かしいし、まさか自分に来るとはなぁ。
ふぅむ…とりあえず、召喚しようとしてる奴の心の中でも覗いてみるかな…。

ほうほう。
なるほどなるほど。
ふーん…。

名前は緑谷出久、か。そんでオールマイトっていうヒーローに憧れて夢がヒーロー、とな。今はヴィランにとらわれた幼馴染を助けるために走り出した瞬間。で、その時にたまらず俺の事を呼び出そうとしてしまった、と。

そっかそっかー…って、えええええ!?

それって確か、前世で漫画に出てた主人公の名前じゃなかったっけ？

千年以上も生きてきてここまでびっくりしたことはそうはないぞおい。なんで漫画の世界の住人が異世界の俺を、ドラゴンを呼び出そうとしてるんだよ。

…いや待てよ。そういやあの主人公の母親は、確か引き寄せる個性を持ってたよな。

そんで緑谷出久は無個性という、いわゆる普通の人間ポジだったわけだけれども。もしかして、母親の個性は特性を変えながらきちんと受け継がれていて、それに本人も周りも気づけなかっただけ、っていう感じなのか？

マジかよ。いや、異世界の話だから漫画とは違うのかもしれないが、色々と衝撃的すぎるわ。

まあ、個人的にはナイスタイミングなんだが。だって今凄い暇だし。それに千年越しにパソコンでネットサーフィンしたいしマックでジャンクフードの味に酔いしれたい。

――――よし、行くか。

だって呼ばれてるんだしな！こりゃ行くしかないな！

原作介入？バタフライエフェクト？何それ美味しいの？

俺、ドラゴン。人間が作った物語なんて、ぶっ壊してなんぼですが何か？

よし、それじゃ。ヒロアカの世界へれっつごー！

次の瞬間、俺の視界は一瞬で暗転した。

「ぐおおおおあああああああ!!!!」
少女のモノとは思えない咆哮が商店街に響き渡り、そして強烈な爆発音が連続で響き渡った。
「くそっ！凄い個性だ！」
「火ぃ消せる個性持ちのヒーローはまだこないのか！」
「早く助けねえと、あの子あのままだとヤバいぞ！」
鬼のような形相で抵抗を続ける金髪の少女の体には、泥のような物体が巻き付いていた。泥は目をぎょろりとさせて、大きな口を開く。
「高レア級の個性…！こりゃ久しぶりの大当たり…！絶対逃がさねえ、この個性さえあればあのクソったれに一矢報いることができるかもしれねえからなぁ…！」
「っ!!!?」
その言葉を聞いて、少女がまた暴れ始める。悲鳴と怒声、そして爆音が響き渡った。

（かっちゃん…！）
その光景を、僕…緑谷出久は人込みの中から見守る事しかできなかった。
僕の所為だ。僕がオールマイトの邪魔さえしなければ、こんなことにはならなかったのに…！
後悔が僕の胸の中を重苦しく満たしていく。
（僕が、僕がどうにかしなきゃ…）
――でも、もうそんな資格、僕にはない。
思い出すのは、さっきの言葉。憧れのヒーローから突き付けられた現実という名の枷。
僕は、もうヒーローにはなれない…。

（かっちゃんの事だし…大丈夫、だよね…。他のヒーローが来るまで、頑張って。かっちゃん…）

頑張って…。

その時、僕はかっちゃんと目があった。その目は、苦しげで涙も浮かんでいて…助けてって言うような顔をしていて。

「ッッ!!!!」

僕は、後のことすら考えずに走り出していた。

「なっ!?止まれ、少年！あれに突っ込んでいくとか正気か!?」

「おい、止まれ！バカヤロー！」

制止の声が遠く感じた。かっちゃんが僕を見つけて目を見開く。

「なんで…お前が…！デ…ク…!?」

「なんでって…！君が、助けてって顔してたから…！」

僕は強がって笑った。オールマイトが言っていた意味がわかった。ああ、確かに怖いや。でもーーー。

「必ず、助けるから！」

「あの時のガキ…！木っ端微塵だぁ！」

「やめろおおおおお！」

かっちゃんの叫び声が聞こえて、同時に手のひらが僕に向けられる。

「うあああああ！」

次の瞬間。僕の左手が熱く燃え上がった。そして、手のひらに青白い紋章が浮かび上がる。

「え…!?」

「うおっ、まぶしっ…！」

その紋章は一際大きく輝いて、僕らを包み込んだ。

人影を見た気がした。髪の長い、なんでかセーラー服を着た僕と同じくらいの少女。その子は僕に目もくれずにっと笑うと、掌をヴィランとかっちゃんへと向ける。

「…！」

ぶわっと、僕を全身の身の毛がよだつような感覚が一瞬だけ襲った。
そして、次の瞬間不思議なことが起こった。ヴィランが千々になって吹っ飛んで、かっちゃんが解放されたんだ。
「かっちゃん!?」
僕は慌ててかっちゃんをお姫様抱っこでキャッチした。
『ナイスキャッチ。ナヨナヨしてる癖に中々やるじゃねえか』
「うぇっ!?だだだだ誰ですか…!?」
『今は問答してる場合じゃねえぞ。はよ逃げろっ』
「へ？」
「クソガキがあああ!その女寄越せえええ!」
「ひいいいい!?」
僕は慌てて駆け出した。すると影が僕の上空を通り過ぎた。
その影の正体はーー。
「オールマイト!?」
「君に諭しておいて!己が実践しないなど!」
オールマイトは血反吐を吐いてにかっと笑う。
「プロはいつだって命がけ!!!」

――「ＤＥＴＲＯＩＴ　ＳＭＡＳＨ!!!」

次の瞬間、あまりに風圧に僕はかっちゃんと一緒に思いっきりぶっ飛び、ヒーローのシンリンカムイに助けられる事になったのだった。

ーーーーーー

「君、なぜ飛び出して行ったんだ!オールマイトがいてくれたから良かったものの、下手をすれば死んでいたんだぞ!」
「ご、ごめんなさい…」
「それに個性も使ったな!許可なしの個性使用の処分がどうなってる

か、知ってるよな!?」
「へ？こ、個性？」
「しらばっくれようとしたって無駄だ！君の手が光ったのをここにいる全員が見たんだからな！」
「え…？」
　僕は恐る恐る自分の手の甲を見た。そこには、薄っすらとではあるが青白い紋章が残っていた。
「…！」
　これって、もしかして…もしかしなくても…！
「個性!!」
「うおっ!?」
「ぼ、ぼぼぼ僕、確かに個性を…!?夢じゃない！やった、やった!!個性が発現したんだ!!!僕の個性が！」
　僕は涙目になって喜んだ。だって、夢にまで見た自分の個性だ。これでヒーローになれる。やっとスタートラインに立てたんだ!!!
「落ち着け！」
「は、はい！すみません！」
　ヒーローのデステゴロさんが、物凄い形相で僕を叱りつけた。一瞬でしゅんとなった。
「で、でも、僕今までずっと無個性で…！やっと個性が使えるようになったんです！」
「なに…？それじゃあ、今日初めて個性を使ったってことか!?」
「は、はい！」
　僕の様子に嘘はないと感じたのか、デステゴロさんはため息を吐き出して言った。
「初めての個性での暴走じゃ、流石にこれ以上は叱れねえか。少年、浮かれるのはいいが、早い所親に報告して、個性登録もしておくんだぞ」
「はい！ありがとうございます！」
　９０度腰を折って頭を下げた。
「それにしても随分と遅い発現だったな。慣れない事もあるとは思う

が、頑張れよ！」
「はい！頑張ります！」
「良い返事だ！……まあ、個性使用に関しては承知した。だがまだ飛び出して行ったことは叱らないとな！」
「はいっ!?」
　沢山叱られたり次いでに個性の扱いやしちゃだめな事をヒーロー直々に口頭で教わったり、ヒーローになるためにしなきゃならない事をちょっと教えてもらったり連絡先を交換してもらったりした後僕はやっと釈放され、今は家路に着いていた。
　プロヒーロー、デステゴロの連絡先……！僕は久しぶりに増えた連絡先を眺めながら住宅街を歩く。
「…そういえば…」
　それにしても、この個性ってなんなんだろう。
　僕のお父さんは火を噴く個性。そしてお母さんは物を引き寄せる個性だった。そして子供の個性は、どちらか一方か、それか複合型。はたまた突発型なんてものもある。
　僕のこの紋章や、光ったのはお父さんとお母さんどっちの個性でもない。
　発光した後に現れたあの子は、結局あれから姿見えないし。
「発光するだけなら、かっちゃんを引き剥がすことなんて出来なかっただろうし…」
　首をひねっていつもの通り色々と考察しようとするけど、結局情報が少なすぎるしあれ以来手を振っても握ってもうんともすんとも言わない。
　結局謎は謎のまま。
　その日はお母さんと一緒に泣きながらお祝いをして、僕はとにかくやっと個性が発現したことを全力で喜んだ。

2話目

緑谷出久は朝目覚めた瞬間、今日が己の死期であることを理解した。

見慣れた天井。そして朝の光がカーテンから零れ落ちて、外からは微かにくぐもった小鳥たちの鳴き声が聞こえてくる。

その部屋は見る人が見たら多分異様だと思うような部屋だ。トップヒーローオールマイトのあらゆるグッズが大量に置かれていて、どの方向を向いてもオールマイト一色。

そんなホの付く人なのかと誤解されそうな部屋だったが、出久にとっては見慣れたもの。逆に全く変わっていない自分の部屋を見て微かに頭が落ち着いてきた気がした。

出久はごくりと喉を鳴らして、そしてベッドの中に意識を向ける。

暖かいオフトゥン。しかしその温度は今や出久だけのものではなかった。具体的に言うととても柔らかくて気持ちのいい小ぶりな抱き枕が一つ、いつの間にか潜り込んでいた。

抱き枕。否、髪がある。それとてもかわいらしい寝顔も付いている。体温まで実装されてるなんてすごいやハイテクだなぁ。出久は現実逃避した。

「すー…すー…んぅ…」

抱き枕――謎の少女はあどけない寝顔をふにゃりと気持ちよさげに崩して、そして出久の胸に頭を微かにこすらせた。

「…!」

出久は、思考を停止させて、そして――考える事をやめた。

☆

おっす、オラクロ！

昨日ヒロアカの世界に引っ越してきて、主人公である緑谷出久と爆轟勝己を助けた後適当に街をうろついて遊びつくした後、眠たかったから魔力供給もかねて緑谷の布団の中に潜り込んで眠りについたん

だが。
　朝起きたら、緑谷の目に生気がなかった。目を開いているのだから起きてはいるのだろうが、真っ白になって動いていない。指先を目の先で揺らしても全く反応なし。瞳孔も変わらないとか、どんな訓練したらそんな事できるんだよ。
　なんだなんだ？なんでこんな、宇宙に放り投げられた究極生命体のような顔つきで固まってるんだ？
「おい、起きろよお前。もう朝だぞ」
「…」
「おーい、少年？起きろって！」
「…はっ。こ、ここは誰!?僕は一体どこなんだ…!?」
「いや怖い事言ってないでとっとと起きろよ。朝だぞー」
　俺はベッドから浮かび上がって宙で止まって、緑谷の傍に寄った。
「…って、あああああああ！き、きききっき、君は一体、だだだっだっだだだだ…！」
「ＯＫ時に落ち着け少年よ。一から説明してやるから落ち着け」
「え!?あ、はい!!!」
　シャキーン、という音がしそうな動きで正座に移行した緑谷に、俺はとりあえず自己紹介をすることにした。
「昨日ぶりだな少年よ。俺の名前はクロ。お前の個性によって呼び出された召喚獣で、ドラゴンだ。よろしくな」
「…えっ？」
　目をぱちくりとさせた緑谷に対して、言葉を続ける。
「お前の個性、『異世界から者を引き寄せる個性』に召喚されたんだよ。そして俺はそのまま使い魔になったってこと。その右手の甲にある令呪がその証な」
「…え？あ、こ、これのこと…？」
「うん」
　緑谷はしばらく自分の手の甲を眺めていたが、すぐに驚愕を顔に浮かべた。
「え!?えええ！じゃ、じゃあ…君が僕の個性って事!?」

「まあそうなるな！」
「…！」
口を大きく開けて驚愕している緑谷。面白い顔芸だ。
まあ仕方ない。色々と詳しく説明してやるか。

「なるほどつまり僕の個性はお母さんの物を引き寄せる個性が変質して異世界からモノ――――生き物を引き寄せて契約する個性に変わったんだ。でもそんな個性前例が無いしそもそも異世界なんて聞いたこともない。でも目の前にクロさんがいるってことはそれは本当の事で、えっと、でもそれって僕が無理やり引き寄せたんだからクロさんにも凄い迷惑がっていうか、お母さんの個性は出力が低い個性だったんだけど僕のは世界すらもまたいで効果を発揮してるこれは明らかに異常な事で――――」
説明してやると、緑谷はぶつぶつと思案モードに入ってしまった。ちょっと気持ち悪いなおい！
俺はそれを手をたたいて止めて、そして緑谷に手を差し出した。
「まあ、そういう訳だ。これからよろしくな」
「えっ、あ、うん！…って、えええ!?い、一緒に住むんですか!?」
「当たり前だろ。俺がこの世界にいる為にはお前の魔力が必要なんだからさ」
「で、でも！男女がそんなおおお同じ部屋とかダメなんじゃ…！」
「安心しろよ、俺はドラゴンだぞ。トカゲは両生類だ」
「そういう問題ですか!?」
そういう問題だぞ。まあ、俺はメスだし。ドラゴンはトカゲじゃないんだけどな。
まあだけど、心は男だしな。案外間違ってはいない。
「っていうか、もうお前は仮にも俺のマスターなんだからさ。敬語とか辞めろ。後、俺の事はクロな。さん付けとかむず痒い」
「…！」
「いや、そんな壮絶な顔すんなよ」
大丈夫か、こいつ。まあ主人公だし大丈夫なんだろうが。

「とにかく、よろしくな！」
「あ、はははははい…！」
　俺は緑谷の手を取って、無理やり握手した。
「あ、そうそう、お前ヒーロー目指してるんだろ？」
「え、は、はい…」
「敬語…はあ、まあいい。とにかく、俺のマスターになったんだから、なよなよしたまんまは俺の沽券にもかかわる。色々と鍛えてやるから、一緒に最強のヒーローになるぞ、少年！」
　俺がそういうと、緑谷はぽかんとした顔をしていた。
「ひー…ろー…？僕、が…？」
「ん？お前以外に誰がいるんだよ」
「…僕が、ヒーロー…最強のヒーロー…そうだ、そうだよ。僕はこれからヒーローを目指すんだ。皆よりもずっと置いて行かれてる僕が追いつくためには、鍛錬あるのみ…！」
　俺はにやりと笑った。緑谷もそんな俺を見て握り拳を作った。
「鍛えてやるって…一体、どんな事…なんですか？」
「ああ、まあ、それはその時になってからのお楽しみってやつだ」
　その時になるのが楽しみだなぁ。何百年ぶりだろうか、人間を弟子に取るのは。その時は加減が分からなくてちょっとやりすぎて世界を一瞬で滅ぼせるレベルの賢者に育て上げてしまったが。
　まあ、主人公だし多少の無理は効くだろ。そうじゃなくても死にかけだったら俺で治せるし。
　ヘドロ事件が起きて１０か月くらいで雄英入試なんだっけ？
　だったら、あの爆轟勝己の成績を抜かせるくらいには強くしてやらなきゃな！
「…！いま、なんだかすごい寒気が…！」
　後ろで緑谷がなんか言ってたが、俺の耳には届いていなかった。